

二程の歴史観

佟欣妍

儒学における復古の性格は孔子を濫觴とし、以降、歴代の儒者が有するものだといえよう。しかし、「三代」という理想政治への憧憬が現実問題の解決案と繋がり、深刻な社会的な変革をもたらせたのは、宋代特有の政治文化の現象だともいえよう。¹「三代へ戻る」という呼びかけで、宋代の士大夫たちは、文学・政治・儒学など幅広い領域に画期的な改革運動が起こされた。朱熹によつての回顧は次のようである。

「国朝初期において、人々はすでに礼儀を崇め、経術を尊び、二帝（堯舜）三代（夏商周）の治に戻ろうとして、唐代の人物に勝っていると自信した。但し未だ十分にいい表すことができないところがあって、二程が出るまで、その道理は初めではっきりといひ表さられた。」（『語類』巻百二十九）²

このように最後に二程に帰結するのは、従来の研究においては、理学内部の視座からの説として受け止められることが多い。しかしながら、逆に見れば、それは二程の理学を唱えた当初、歴史への認識に関心が置かれていたとも考えられる。本稿はこの視座から、二程の歴史観をめぐって、彼らの「天理説」を以下の二つの方面から再検討するつもりである：

- 1、理学言語の建築。二程が唱えた「天理」や「道」の概念は、形而上・下の分別によつて、堅苦しい典章制度から「聖人の意」を論じる空間が開かれたのみならず、孟子から直接承継した説によつて、時間の存続でなく、「道」の断裂と接続で歴史を理解することも含まれた。そして、聖人を標的として理を極める（窮理）の「学」も、「道」をつなぐという歴史責任として、学者に責められた。
- 2、治乱循環の歴史観。孟子以来の「一治一乱」の循環的歴史認識は、二程に至つて体系性が付与されたと考えられる。それは、「動静無端、陰陽無始」の無始無終の宇宙観でもあり、君子・小人の比例と位置づけを歴史の動かす動力因にすることでもある。同時代の経学や史学と比べて、二程の理学歴史観は歴史哲学の気質に富んでいると考えられる。

¹ その点は、余英時氏も『朱熹の歴史世界』の『回向三代』一節で詳論した。

² 『語類』巻百二十九「国初人便已崇礼義、尊経術、欲復二帝三代、已自勝如唐人、但説未透在。直至二程出、此理始説的透。」